第41号　50円
昭和51年３月25日

内　容

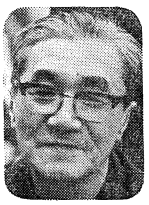
明日の世界を考える……1
千人会報告……2
入会のこころを探る……3
開館10周年300万円募金報告……4
クリスマス交歓会……5
第81回大学共同セミナー……6
第82回大学共同セミナー……7
共同セミナーに参加して……8
館長日記から……9
業務通信…9　利用状況…9～10

セミナー・ハウス
SEMINAR HOUSE NEWS

発行
財団法人 大学セミナー・ハウス
≪所在地≫
東京都八王子市下柚木
（〒192-03）
電話　0426-76-8511～3
振替口座　東京　74590番
≪東京事務所≫
東京都中央区日本橋本町3―3
三井銀行本町支店ビル5階
電話　東京（241）3961
編集・発行人・飯田宗一郎
製作　中央公論事業出版

明日の世界を考える

開館十周年記念シンポジウムから



国際基督教大学教授
東京大学名誉教授
大塚久雄

将来を見通すということはひじょうに難しい問題です。とりわけ、社会現象はなんらかのそれ自体可変的なビジョンをもって行動している人間諸個人の総体ですから、どうしても法則化して捉えることのできない一面を含んでおり、これが予測を本質的に困難なものにしています。しかし、われわれは将来を予測しないわけにはいきません。将来をできるだけ的確に見通していくためには、できるだけ事実を正確に網羅的に調査し、それを整理して、そこから一定の幅をもった客観的可能性を見出し、それを頼りに考えていくよりほかはないようです。

ところが、その場合にも難しい問題が出てきます。出発点としなければならない現在、つまりわれわれの眼前の現実の中には過ぎ去った過去が分離し難い形で入り込んでいます。現在をなんとかしようとすると、この過去が全身に痛みを感じさせる、そういう仕方で現在の中に入り込んでいる。こうした意味で現在と関連をもつ限りでの過去が歴史と呼ぶに相応しいものだと、私はつねづね考えております。それは勿論、対象的な事実についていえるばかりでなく、また社会科学のいろいろな理論についてもいえるわけです。理論も過去の事実に基づいて作り出されたものですから、過去との関係から切り離すことはできません。

さて、そういう過去の楔はどういう形で現在の中に打ち込まれているのかといいますと、その仕方はすべての部分が皆同じように均等にというわけではなく、先頭に進んでいる最先端は深く、遅れている後尾は浅く、というふうにすべての部分が不均等のまま相互に絡まり合いながら、過去が現在の中に入り込んでいる。つまり段階論的に、また実は類型論的にも、そういう非常に不均等な発展を孕みながら現在は未来へと動いているわけです。

ところで、こういう歴史的現実について、従来はまず先頭に進んでいた国々がどんどん先に進み、専らそのお陰を被りながら、後れた国々が引っぱられてついていく、努力してついていかなければ取り残される、取り残されるのは自分の責任だから後進諸国は何とかして追いついていかなければならない、そういうような単純な形で段階論的な考え方をするのが一般的だったといえるでしょう。

ところが第二次世界大戦以後、ヨーロッパの文化に孕まれていた問題が表面化してくるにつれて、非ヨーロッパ的後進の開発途上諸国の文化も単なる蒙昧とか未開などではなく、それぞれ固有の意味と論理をもつ独自な文化だという考え方が次第に生まれてきました。言いかえれば、いわゆる開発途上国の文化には、先進国の過去の経験あるいは事実に基づいて作りあげられた従来の社会理論・経済理論では到底割り切れない底があるということがわかってきました。つまり、発展途上諸国の文化は皆それ自体の独自な論理をもっており、先進諸国の文化の単なる延長として考えるわけにはいかないということです。例えばアメリカ合衆国とインドの経済が同じ論理で捉えきれるとは到底考えられない。どうしてもそこに類型論ともいうべきものを入れてこなければならなくなる。過去の理論が間違っていたということではなく、それを超えるような理論が必要になってきた、つまり過去の理論を相対化する一般理論が必要になってきた、そういえるのではないかと思います。

このように考えてくると、次の二つの点が重要視されなければならなくなってきます。一つは文化をその根底で支えている自然的・地理的条件であり、いま一つは自然とは正反対の極で文化を超えているもの、つまり人間論を含む思想、とくに宗教の問題であります。世界中のすべての地域、すべての国々が皆究極にはおのずから同じ論理に支えられた文化へと到達するというのではなくて、それぞれの文化が皆それぞれ個性的な論理と自立性をそなえながら、あるいは助けあい、あるいは反発しあい、あるいは絡まりあい、あるいは衝突しあいながら世界全体を形づくりつつ「明日の世界」に入り込んでいくのだ、という認識がいまや少なくともひとつの前提にならなければならなくなってきたように思います。

こうして浮び上ってくるのが、人間類型論と、それを踏まえた文化比較の問題で、これこそが今後社会諸科学の基礎あるいは背景として探究されなければならなくなってきているように私には思われます。M・ヴェーバーは自分の宗教社会学の内容を表現するのに、Die vergleichende Religionssoziologie という言葉を使っておりますが、その研究を支えるために彼は Ethos と Wertfreiheit の問題に入っていかざるをえませんでした。こうした彼の理論的枠組は、現在われわれが「明日の世界を考える」ための好個の観念装置を提供しているように思われるのであります。

（文責編集者）

千人会

半月にして
感動的な記録をつくる

開館第十一年目の昭和51年の初仕事は千人会のお誘い状を発送することであった。郵便料金値上げの25日直前まで、事務局職員一同は、「どうぞお願いします」という祈りをこめて、毎日の発送事務に専念した。

現在会員のうち約五〇〇名は、もう七年もつづいている方々であり、驚くことに二三〇人が、九年会員であり、しかもその中には、一人の物故者もなく脱退会員もいないのである。さらに驚嘆すべきことは、現在会員の中に七〇歳以上の方が九二名おられることである。

今回積極的に会員の勧誘を行うに至ったのには理由がある。一つには高年齢の会員が多いので、次の世代から後継者を探したいこと、二つには既に数年以上にわたって会費を寄付されている会員のご熱心なご支援を改めて感謝しながら、同様のご関心をもって、先輩会員の後につづいて下さるような新会員を募りたいこと、三つには、不況と高物価の中で財団の経営を安定させながら、学生、教授達など利用者の処遇を悪化させないための収入の一助となっていただきたいこと、そして四つには、十年の歴史をつくった大学セミナー・ハウスが、次の十年に国公私立にわたる大学共同体としての使命を果たし、いよいよ学際的教育活動の拠点となるために、個人会員の層を広くしたいことなどの目的から、新年を期して会員増加運動を開始したのである。

大切な金銭を継続してご寄付いただくことである。維持後援会ともいうべき千人会の必要性を広い社会の人々に、わけても大学人に納得していただくことが何より必要なことである。独りよがりになって献金を仰ぐことは厳に慎まなければならない。われわれのような民間の教育事業に国の補助金を多く望めないのが現状である。「市民参加」とか「経営参加」という言葉はあるが、自発的に経費を分担して組織を強固にするという建設的な連帯意識にまでは発展しないのが現状ではあるまいか。われわれは集団の意志決定を先ず求めがちであるが、千人会は、むしろ個人を重視し、その連帯感に期待する「個人参加」の可能性を人間の善意に賭けたということができよう。

仮りに今回の勧誘に対し、一人の反応者も出なかったとすれば、大学セミナー・ハウス十年の歴史は虚構として崩れ去るばかりでなく、本紙38号の茅誠司先生の「創立十年史の刊行を祝う」も、同じく39号の永井文部大臣の「大学院セミナー館の落成を祝う」も、さらに40号の手塚富雄先生の「十周年記念式のこと」という三つの文章は、虚飾の文字と化してしまうであろう。

期待に違わず大学セミナー・ハウスは多くの支持者に恵まれ、本号記載の如く新しい会員を、後継部隊として、あるいは応援部隊として、迎えることができたのである。このように多数の会員を一時に迎え入れたことによって、千人会は実に感動的な記録をつくったわけである。この記録は、大学セミナー・ハウスの命運を決定するばかりでなく、「大学を開く」という新しい試みを成功させたエネルギーが個人の善意であったことを日本教育史は記すに違いない。

大学セミナー・ハウスは第一報として、下記のとおり一〇七名におよぶ新会員のご入会に厚く感謝し、日常活動の中でご好意に報ゆることを誓わなければならない。

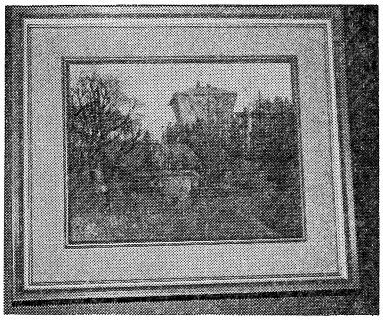
開館十周年会員増加運動第一報
新会員の〝こころ〟とともに

◆新しく会員となられた方々

昭和51年1月現在（申込順）
A会員＝七名
B会員＝四三名
C会員＝五七名

C 上智大学教授　岡村秀勇殿
B 通産省工業技術院繊維高分子材料研究所　安宅光雄殿
C 法政大専任講師　佐藤康男殿
C 日本赤十字社幹部看護婦研修所　小林清子殿
C 専修大学教授　安藤賢一殿
C 私立武蔵高等学校長　大坪秀二殿
C 東京工業大教授　関口利男殿
B 電気通信大学助教授　合田周平殿
B 主婦　今井　栄殿
C 淵野辺小学校教諭　由良慶子殿
B 慶応義塾大学助教授　宮下啓三殿
C 東京大学助教授　石井　進殿
C 成蹊大学助教授　高橋三雄殿
B 都立府中高等学校教諭　松沢正夫殿
B 東京大学助教授　森田桐郎殿
C 早稲田大学学生　山田芳孝殿
B 学習院大学教授　岡本哲治殿
C 上智大学教授　緒田原涓一殿
B 横浜国大教授　工藤英明殿
B 津田塾大学教授　藤村瞬一殿
C 上智大学助教授　町野　朔殿
C 上智大学教授　市川邦彦殿
C 学習院大学教授　小倉芳彦殿
B 早稲田奉仕園主事　高里勝介殿
C 武蔵大学教授　佐藤　進殿
B 成蹊大学教授　別枝達夫殿
C 法政大学教授　三浦徳弘殿
C 学習院大学教授　清水昭次殿
C 成蹊大学教授　飯田芳男殿
B 学習院大学教授　吉田耕作殿
C 法政大学助教授　矢田俊文殿
C 法政大学教授　平野鉄太郎殿
C 立教大学教授　正田　亘殿
C 共立女子大学図書館員　上野　一殿
C 一橋大学助教授　石　弘光殿
B 武蔵大学教授　西山忠範殿
C 職業訓練大学校　宗像元介殿
A 早稲田大学教授　西宮輝明殿
B 共立薬科大教授　堤　彪殿
B 東京工業大学助教授　出淵　博殿
C 東京外国語大学教授　山之内靖殿
C 武蔵大学助教授　佐野　晃殿
B 東京大学教授　斎藤　真殿
C 東京工業大学教授　武者利光殿
B 東京大学助教授　岡村　甫殿
B 一橋大学教授　外池正治殿
C 日本大専任講師　山田　睟殿
B アジア経済研究所主任研究員　林　武殿
B 茨城県立結城第一高校教諭　湯本　孝殿
B 東京大学教授　山井　湧殿

C 東洋大学教授　松岡八郎殿
C 一橋大学教授　勝田有恒殿
A 津田塾大学教授　細井　勉殿
B 一橋大学助教授　永島　孝殿
C 明治学院大学助教授　満田郁夫殿
C 明治学院大学教授　宮野　彬殿
C 東洋大学助教授　北村嘉行殿
A 日本学術会議副会長　伏見康治殿
C 東洋大学教授　八木江里殿
A 東京外国語大学付属日本語学校講師　福本日陽殿
B 東京大学教授　今道友信殿
B 東京外国語大学教授　小沢重男殿
B 法政大学教授　瀬部　孝殿
B 日本社会事業大学教授　小川政亮殿
C 日豪㈱社長　中島　徹殿
C 専修大学助教授　宮坂　宏殿
C 東京大学教授　永積　昭殿
C 学習院大学教授　加藤秀俊殿


八王子市、行近壮人氏（日展所属）寄贈

B 明治学院大教授　羽田　新殿
C 津田塾大学講師　小倉充夫殿
C 東洋大学助教授　三浦安子殿
B 拓殖大学教授　安芸皎一殿
C インディド造園企画㈱代表取締役　山崎　典殿
C 山梨英和短期大学助教授　小菅東洋殿
A 専修大学教授　打田峻一殿
B 日本女子大学助教授　小川信子殿
B 国際基督教大学準教授　川瀬謙一郎殿
B 文化庁長官　安嶋　弥殿
B 大妻女子大学教授　隈部直光殿
B キャノン㈱社員　佐久間純郎殿
C ゴールド・トージョー&カンパニー代表者　東条秀光殿
B 東京大学教授　西嶋定生殿
C 東京大学助教授　金子　晃殿
B 東京大学教授　今堀和友殿
C 東京大学教授　渡辺　仁殿
C 東京大学教授　田中英夫殿
C 東京大学助教授　高橋　彰殿
B 上智大学教授　土屋金弥殿
C 上智大学教授　横沼健雄殿
C 読売新聞社会部　田中正人殿
C 明治大学教授　篠崎　武殿
B 東京農工大学教授　田原虎次殿
B 電気通信大学教授　宅間　宏殿
B 東京理科大学教授　上野芳夫殿
B 七洋産業㈱常務取締役　安藤利亮殿

♥入会の〝こころ〟を探る

このたび千人会に入会いたしましたところ、図らずも『大学を開く』を御恵与にあずかり、まことにありがとう存じました。私は昨年暮れ近く学生のゼミで利用させていただきましたが、その折りには知らなかった創立以来の歴史を読ませていただき、大変得るところ大でありました。また大変個性的であると感じられたそれぞれの建築についての設計者のお考えにも興味をひかれました。

東京大学助教授　石井　進

◁

先日は思いがけなくセミナー・ハウス開館十周年記念の論集をお送りいただきまして本当にありがとうございました。三枝先生にはセクション・リーダーとしてご指導いただいたこともございますので、懐しく拝読させていただいております。

第3回「科学と宗教」のセミナーに参加させていただいて以来、卒業までの二年余り計り知れない多くのものを与えていただきながら、大学卒業と同時に多摩の丘ともすっかりご縁が切れてしまったようで心寂しく思っておりました。もう八年近くのご無沙汰になります。

ちょうどそのような折りでしたので、今回の千人会へのお誘いはありがたいことでございました。会のご趣旨には以前から共感いたしておりましたので、喜んで加入させていただきます。今後ともどうぞよろしく長いお付き合いをお願いいたします。

主婦　黒田まゆみ

◁

昨年暮れに会のご案内をいただき早速に千人会に入会いたしたいので手続きをお願いします。また、十周年記念にも募金させていただきます。

都立府中高校教諭　松沢正夫

◁

いろいろなかたちで何度か利用させていただいたことがありますが、今回はじめて千人会のご案内をいただき、入会の申込みをさせていただくことにしました。

上智大学教授　緒田原涓一

C 成蹊大学教授　沢島侑子殿
C 主婦　黒沼　稔殿
B 東京大学教授　黒田まゆみ殿
C 法政大学教授　梅村　魁殿
B 慶応義塾大学助教授　下森　定殿
C 日本学術会議第六部副部長　鳥居泰彦殿
A 国際連合大学出版部長　福島要一殿
C 東京農工大学教授　箕輪成男殿
喜多　勲殿

◁

住宅ローンの返済のためCからスタートさせていただきます。今度転居して幾分セミナー・ハウスに近くなりましたので、出来るだけお手伝いしようと思っています。共立女子大図書館　上野　一

◁

二度ほどゼミナール講師を引受けただけのご縁なのに、何時も出版物をありがとうございます。また私でお役に立てることがあればと存じております。

アジア経済研究所　林　武

◁

過日の八王子駅伝の節は大変お世話になりました。第5位に入賞することができました。今後共よろしくお願いいたします。

茨城県立結城第一高校教諭　湯本　孝

◁

大変微力でございますが、入会させていただきたく申込みいたします。時々利用させていただくたびに、自然の美しさと文化の香りとのみごとな調和に心が安らぎ、みちたりて帰ってまいります。

東洋大学助教授　三浦安子

♣千人会報告（つづき）

◆会費ありがとうございます

昭和50年12月～昭和51年1月
（敬称略）

伊能敬、小野茂、松元文子、森繁雄、斎藤信房、近藤保、相馬勝夫、高橋正男、阪田正三、細田友雄、水野伝一、木村久男、江副敏生、谷重雄、高橋浩爾、武者小路公秀、関竜夫、横井芳弘、江上不二夫、手塚富雄、安藤瑞夫、勝木保次、大地羊三、杉山吉茂、新井益太郎、笠井貴征、山科高康、小穴純、西巻正郎、岡本敏雄、市川惇信、戸塚元吉、三辺正雄、小川圭治、松本樺太、飯野利夫、戸田盛和、井上達雄、竹村研一、田村皖司、斎藤忠利、関口実、岡惺治、内田芳明、有山正孝、示村悦二郎、川鍋正敏、清水誠、来住正三、大塩俊介、柳下綱道、安味貞正、池田温、山本幹夫、岡崎正、宮川松男、平松幸一、茅伊登子、佐島秀夫、池田貞雄、和田木松太郎、茂木誠陸、西田亀久夫、久松潜一、山田潤二、浜川祥枝、竹中肇、三浦永光、三井為友、太田敬三、三宅義夫、山本澄子、杉山好、大坪秀二、関口利男、田村光三、海老沢克之、笠原正成、飯田能子、安宅光雄、江藤淳、三戸公、川本茂雄、吉田光孝、合田周平、佐藤豪、村田和巳、由良慶子、岸英朗、今井栄、村井実、望月昭一、高里勝介、別枝達夫、西川大二郎、宗像元介、岩本ミチ、友部浩、末永国明、高山利勝、三井利夫、平木典子、福原満洲雄、岩尾裕純、バッケス・ジャン、江幡玲子、小西正捷、中鉢正美、湯浅光朝、清水啓三郎、中尾信之、徳久球雄、高木亀一、伊藤学、塚本利明、友部直、石田孝夫、増田義男、田中悦子、天野成光、木村敏美、大内英吾、宮本勉、赤松秀雄、後藤聰一、関嘉彦、桑原哲郎、小山弘志、宮部直、佐々木彰、深沢実、石井明、矢野正、林喜男、山本満、蒲生叡輝、永井晃子、武藤義夫、森山俊雄、升本喜兵衛、高橋恒郎、大橋万知江、武村次郎、大原恭子、園田義道、上田明子、武田昌輔、渡辺忠胤、山田圭一、野中虎雄、鈴木博、村上真、伊藤文人、斎藤耕二、波多江健郎、一番ヶ瀬康子、久保内端郎、喜多村和之、竹内啓一、松沢正夫、新井明、光延明洋、白井泰四郎、石川明、高橋源次、青井和夫、松山正男、石田竜次郎、中冨光国、根岸愛子、岡田純一、岩永達郎、清水畏三、木村康雄、小俣喜久治、若林貞雄、森田豊夫、内山正熊、増地昭男、小林甫、磯村英一、大川章哉、茅野良男、松原元一、谷口修、富沢賢治、広瀬一彦、小川洋輔、中山知雄、越智昇、高橋昭三、原増司、有賀喜左ェ門、小谷正雄、松元三郎、守永誠治、関口晃、京極純一、上谷琢之、福島杉夫、大頭仁、磯野修、石塚司農夫、公文俊平、加倉井茂樹、飯尾右一、川喜田愛郎、山田昭房

千人会会費に添えて

ほどなく63回目の誕生日を迎えます。今年は2月に二度の外科手術を受け危い命を救われました。そして来る1月3日の誕生日に先立って年毎の贈り物を差し上げる歎びに恵まれました。セミナー・ハウスの御隆盛を祈り上げます。

昭和50年12月18日　川本茂雄
（早稲田大学教授、昭和43年以来のA会員）

▷

昨年秋、開館十周年記念式典に出席でき、大変うれしく思いました。私は大学セミナー・ハウスを卒業して二年目でありますが、大学セミナー・ハウスの偉大さをつくづく感じております。セミナー・ハウス卒業生として、また千人会員として今後ともささやかな支援をしてゆくつもりです。飯田先生のご健康とセミナー・ハウスの発展をお祈り申し上げます。

東亜燃料工業　大原洋司

◎開館十周年記念＝三〇〇万円募金報告

累計二、一一七、一四一円
（昭和50年12月～51年1月）

◆ご支援を感謝して拝受いたしました

一〇、〇〇〇円　聖心女子大学長　相良惟一殿
一、〇〇〇円　上智大生　中田睦子殿
九、〇〇〇円　第81回共同セミナー参加者殿
五、〇〇〇円　同志社高校元用務員　安原スガ殿
五、〇〇〇円　同　新田のぶ殿
二、〇〇〇円　東洋大学教授　藤木三千人殿
一五、〇〇〇円　館長　飯田宗一郎殿
一、〇〇〇円　当ハウス職員　西村県治殿
三、〇〇〇円　同　長島洋子殿
一、〇〇〇円　同　坂本光子殿
三、〇〇〇円　同　北沢高純殿
一、〇〇〇円　同　伊藤清子殿
三、〇〇〇円　同　石井孝幸殿
一、〇〇〇円　同　荒川孝子殿
一、〇〇〇円　同　小柳アヤ子殿
五、〇〇〇円　同　藤永鉄雄殿
一、〇〇〇円　同　岡治政信殿
三、〇〇〇円　同　綿引二郎殿
二、〇〇〇円　同　前田　寿殿
二、〇〇〇円　同　田島賢一殿
一、〇〇〇円　同　田島澄江殿
五、〇〇〇円　東映生田スタジオ　大里俊博殿
九、四一円　本館募金箱　武者英二殿
三、〇〇〇円　東京工業大学教授　榎本　肇殿
二、〇〇〇円　高橋　健殿
一、〇〇〇円　東京大学　山本俊一殿
一〇、〇〇〇円　東京工業大学教授　江藤　淳殿
二、〇〇〇円　一橋大学助教授　石　弘光殿
二、〇〇〇円　東邦大学教授　吉田光孝殿
二、一〇〇円　上智大学宇野ゼミ殿
三、〇〇〇円　日本航空電子工業㈱　人事一課長代理　武井　政殿
一〇、〇〇〇円　東京理科大学　大沢綱一郎教授研究室殿
二、〇〇〇円　都立戸山高校　石井　清殿
五、〇〇〇円　自動車の排気浄化研究会殿
二、〇〇〇円　東京工業大学教授　関口利男殿
五、〇〇〇円　東京外国語大学助教授　山之内清殿
一、〇〇〇円　東京大学助手　石井　明殿
一〇、〇〇〇円　慶応義塾大学教授　山本　登殿
三、〇〇〇円　電気通信大学教授　平島正喜殿
三、〇〇〇円　拓殖大学教授　泉　三義殿
二、〇〇〇円　明治大学教授　藪本忠一殿
二、〇〇〇円　東京学芸大学助教授　高橋勇悦殿
五、〇〇〇円　早稲田大学教授　中尾清秋殿
二、〇〇〇円　東京都立大学教授　東　洋一殿
二、〇〇〇円　東京都立大学教授

◎募金報告つづき

一、000円	東京経済大学講師	鈴木二郎殿
一、000円	劉　進慶殿	
五、000円	東京工業大学助教授	古田勝久殿
五、000円	東京都立大学教授	塩崎　進殿
三、000円	法政大学教授	渡辺一夫殿
三、000円	法政大学教授	野田正穂殿
三、000円	東洋大学短期大学助教授	村松友次殿
二、000円	東京都立大学助手	岩瀬方子殿
二、000円	東京工業大学助教授	椎貝博美殿
二、000円	慶応義塾大学教授	田島一郎殿
五、000円	日本学術振興会理事	岡野　澄殿
二、000円	東京学芸大学助教授	降旗勝信殿
二、000円	日本赤十字社幹部看護婦研修所	小林清子殿
二、000円	東京農工大学教授	田原虎次殿
五、000円	東京都立工業短期大学教授	吉田竜郎殿
五、000円	中央大学教授	岡地　嶺殿
三、000円	慶応義塾大学助教授	山田辰雄殿
三、000円	当ハウス職員	前田寿氏夫人愛子殿
三、000円	国士館大学教授	亀山　潔殿
一〇、000円	早稲田大学教授	西宮輝明殿
三、000円	中央大学助教授	伊藤成彦殿
五〇、000円	㈱明治屋本社	社長　磯野謙蔵殿
九、三00円	滝の川教会学校	
三、000円	東京女子大学教授	福田一郎殿
一〇、000円	立川スプリング㈱	社長　斎藤武二殿
一〇、000円	東京家政大学助教授	宮崎照子殿
五、000円	上智大学教授	松本重一郎殿
五、000円	法政大学教授	下森定殿
五、000円	慶応義塾大学助教授	鳥居泰彦殿
三、000円	東京教育大学教授	小林達吉殿
二、000円	横浜国立大学助教授	市川　博殿
二、000円	東京農工大学助教授	高橋　香殿
二、000円	中央大教授	林泰造殿
三、000円	法政大教授	古川哲殿
三、000円	専修大学教授	内田義彦殿
二、000円	東京都立大学教授	大蔵隆雄殿
三、000円	東京学芸大学助教授	新井秀一郎殿
五、000円	中央大学教授	矢部浩祥殿
三、000円	法政大学講師	古沢常雄殿
二、000円	成蹊大学	野原茂之殿
二〇、000円	第82回共同セミナー指導教授殿	
一六、000円	第82回共同セミナー参加者一同殿	
一、000円	武蔵工業大学教授	堺　孝夫殿
三、000円	東京教育大学助教授	山本光男殿
三、000円	慶応義塾大学教授	神山四郎殿
三、000円	電気通信大学教授	宅間　宏殿
二〇、000円	全日本デパートメントストアーズ開発機構	
一、000円	日本大学助教授	榛沢芳雄殿
三、000円	都留文化大学講師	和田明子殿
五、000円	日本大学助教授	阿部竹松殿
五、000円	都立府中高校教諭	松沢正夫殿
一、000円	東海大学助手	高橋公雄殿
三、000円	日本女子大学教授	上村悦子殿
二、000円	東京医科歯科大学教授	岡島道夫殿
二、000円	早稲田大学講師	野村タチアナ殿
二、000円	成蹊大学助教授	三角正明殿
一〇、000円	日本橋興業㈱	社長　大塚一也殿
一、000円	東京経済大学助教授	佐藤　博教

▼クリスマス交歓会

昭和50年12月22日21時半

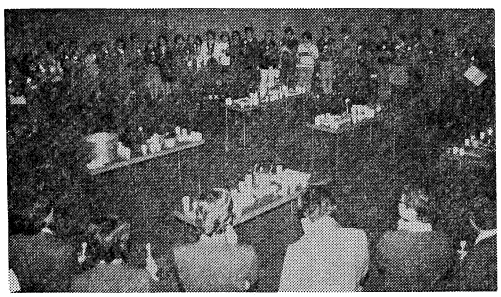
当夜の宿泊グループの中から次の六グループ、約80名が参加してクリスマス交歓会が講堂で行われた（東京理科大・大沢ゼミ、芝浦工大・藤沢ゼミ、成蹊大・宇野ゼミ、同大・村松ゼミ、杉野女子大教育原理ゼミ、独協大・児玉ゼミ）。プログラムは、それぞれのゼミの演習が一区切りついた夜9時半から開始され、まず飯田館長が歓迎の挨拶を述べ、各グループの自己紹介のあと、甘酒、コーヒー、紅茶を飲みながら自由に歓談の時を持った。

つづいて各グループから出し物が披露され、また企画室の職員と年輪の会の学生有志による寸劇も演じられた。題して「コントで綴る開館十年史」。中でも杉野女子大のファッション・ショーは服飾を専攻している彼女らの大学生活が伺えて興味深かった。

一入、愉快に時を過したあと、国立音大学生・西村博子さんのヴァイオリン演奏（ピアノ伴奏、同大・伊藤きみ子さん）を聴き、成蹊大教授・宇野重昭先生からクリスマスのメッセージをうかがった。宇野先生は、キリスト教の西洋思想に及ぼした影響を考えることはあっても、その中心にある〝愛〟について知る人は少ないのではなかろうか、クリスマスというこの機会に愛が聖書の中でどのように語られているかを知ることも意味があるのではないかと述べられ、コリント第13章を引用された。

最後に参加者全員でキャンドルサービスを行い、輪になった小さいローソクの明かりの中で讃美歌を合唱した。このキャンドルサービスの中で心身障害児の施設島田療育園の子供たちのためにクリスマス献金が呼びかけられ、募金箱等を合計した一三、〇〇〇円が25日、当ハウスより島田療育園に届けられた。

このクリスマス交歓会は開館十周年に当って行事の多かった一九七五年のしめくくりとして館主催の最後のプログラムとなったわけである。



キャンドルサービス（歳末風景その1）

第81回大学共同セミナー

主題――今日の婦人問題

―平等・発展・平和―

期日――昭和50年11月21～23日

《全体講義》
婦人と大学教育
東洋大学助教授　神田道子氏
《ゲスト講演》
婦人と平和について
日本女子大学名誉教授　上代タノ氏
《報告》
国際婦人年世界会議で何が語られたか
読売新聞社婦人部記者　深尾凱子氏
《セクション演習》
A　婦人労働上の未解決の課題
評論家　影山裕子氏
B　北欧における男女平等―とくにスウェーデンについて―
日本大学教授　高須裕三氏
C　文化人類学からみた男性と女性
国立民族学博物館教授　祖父江孝男氏
D　家族法における婦人の地位の問題点
お茶の水女子大学教授　湯沢雍彦氏
（運営委員）
《運営委員》
津田塾大学教授　大東百合子氏
《参加学生》93名（内女子74名）
津田塾大(18)、早大(12)、東女大(6)、慶大(5)、東外大(4)、東大、東京学芸大、中大、聖心女大(各3)、東京医歯大、都立大、明大、日大、成蹊大、ICU、東京家政学院大、都留文科大(各2)、電通大、お茶の水女大、日女大、明学大、共立女大、上智大、東洋大、専修大、学習院大、横浜国大、埼玉大、横浜市大、独協大、清泉女大、宮城学院女大、大阪市立大(各1)、その他(4)　合計33校

◇　◇

三回目を迎えた本年度の〝国連セミナー〟は、国連提唱の国際婦人年に因んで「今日の婦人問題」をテーマに選び、副題には婦人年の三つの目標である平等・発展・平和をかかげた。

セクション指導には、日本電電公社の調査役として実務に当たり、また有職婦人連盟会長として特に職場における女性の立場を代弁しておられる影山裕子先生、北欧とくにスウェーデンの経済と社会の研究では第一線で活躍されている高須裕三先生、アラスカ・エスキモーや日本の県民性などユニークな研究をしておられる文化人類学の祖父江孝男先生、そして総理府婦人問題担当室の唯一の男性参与であられる法社会学の湯沢雍彦先生が当たられた。各テーマで得られる最適の方々を講師にお迎えすることによって、婦人のおかれている現状をさまざまな分野から、歴史的に国際的展望の下に見直そうというこのセミナーの目的が十分に達せられたわけである。

〝婦人〟を真正面からとり上げた共同セミナーは今回が初めてであったので、学生の反響が注目されたが、定員をこえる百余名の熱心な申込みがあり、心配された男子学生の参加は予想を上廻って一九名を数え、さらに数名の社会人の参加もあって、婦人問題を考えるセミナーに十分な参加者を構成することができた。

当ハウスにとって大変喜ばしいことは、創立以来の深い関係者であられる上代タノ先生を共同セミナーの講師として初めてお迎えできたことである。先生は第一次大戦以来の世界の婦人の平和への努力を語られ、今日なお拡大を続ける核の軍事・非軍事利用がともに人類を破滅に導く可能性を警告された。また、国連セミナーということで初日に国連大学最高法律顧問補佐Z・L・サイナー博士が姿を見せられ、夕食会のスピーチで国連の目的を達成するためには国際的レベルだけでなく各国の国内的レベルでの努力が不可欠であるとし、セミナー・ハウスによるこのような教育活動こそそのよい実例であると、セミナーの意義を高く評価された。

今回の共同セミナーが期待どうりの成果を収めることができたのは、大東先生、湯沢先生の企画・運営両面にわたるご尽力に負うところが大きい。

「今日の婦人問題」をふりかえる

お茶の水女子大学教授　湯沢雍彦

一九七五年には、国際婦人年を記念して内外で各種の催しが開かれたが、このセミナーは、まさに学生版婦人問題会議というに価するものであった。姫路から仙台まで、男子一九名、社会人四名を加えて一〇〇名近くにも上った参加者の多さは、テーマへの関心の高まりをよく示している。

「平和」と「高等教育」が婦人問題の大きな基礎条件であることを警告した上代タノ日本女子大名誉教授と神田道子東洋大助教授の全体講義から幕を切ったそれは、国連広報センター提供の映画「女性――その未来の役割」を観賞し、メキシコでの「世界会議で何が語られたか」を読売新聞深尾凱子記者に紹介してもらうことによって、国際的展望の必要性と、各国のヴァリエーションの大きさを改めて心することを、共通の土壌として出発することができた。

セクション演習は四種設けられた。「A婦人労働上の未解決課題」と「D家族法における婦人の地位の問題点」は、職場と家庭という両立困難な二大分野において、形式的平等は保障されながらも、実質的にはなお女性の不利益をもたらす諸点の現状と原因とを追求した。前者では終身雇用・年功序列賃銀慣行と、保護か平等かをめぐる理念的対立が大きいこと、後者では、家意識の残存と伝統的生活慣習の根強さがとくに取上げられた。「B北欧における男女平等」は、とくにスウェーデンの職業・所得等の平等が、天然資源と地理的好位置のほか、長い平和と福祉および性の自然融和観に支えられた近代社会の超克の上に築かれたものであることが紹介され、「C文化人類学からみた男性と女性」では、母系制であることと地位の上下とは直結しないし、男女の性格や適性の差異を明確に証明することは難しいなど、男女差別の本質が未開社会や前近代社会をめぐって慎重に検討された。

これらの熱っぽい論議は、シンポジウムから送別パーティにまで持ちこされ、理論を実践化した実績をもって再び一〇年後に集い、論じ合うことを誓って散会したのであった。

第82回大学共同セミナー

主題——革新的伝統の追究

期日——昭和51年1月16～18日

《発題講演》
伝統と変革
東京経済大学教授　色川大吉氏
《ゲスト講演》
中国における伝統と革命
京都大学助教授　山田慶児氏
《セクション演習》
A I　土着的発展論としての柳田国男の仕事
上智大学教授　鶴見和子氏
（運営委員）
A II　近代日本の共同体
東京経済大学教授　色川大吉氏
（運営委員）
B　柳田国男の批判と継承
東京教育大教授　桜井徳太郎氏
C　地方主義の行くえ—国際的視野から—
上智大学教授　三輪公忠氏
D　中国—新文明形成への巨歩〈伝統とその革命的蘇生〉—
アジア経済研究所主任調査研究員　小島麗逸氏
成蹊大学教授　宇野重昭氏
（運営委員）
E　革命と社会主義—ロシアと中国の比較
東京大学助教授　菊地昌典氏
《参加学生》114名（内女子28名）
東大（19）、成蹊大（15）、東経大（13）、筑波大（9）、上智大（7）、慶大、津田塾大（各6）、一橋大、早大（各5）、ICU（4）東外大、立大（各3）、東教大、日女大（各2）、東京学芸大、東京医歯大、横浜国大、埼玉大、奈良女大、横浜市大、東女大、東洋大、武蔵大、玉川大、工学院大、桐朋学園大（各1）、その他（3）　合計26校

◇　◇

このセミナーは数年来、「アジアの伝統の革新的再生または創造をめざして」共同研究を続けてきた近代化論再検討研究会がその成果を広く学生に分かつために企画されたもので、別掲の二つの講演、六つのセクション演習とも、その講師にはすべて同研究グループのメンバーが当たられた。

欧米をモデルにした近代化論の再検討を通じて、日本や中国、ソ連など非西欧社会の伝統的思考がそれぞれの社会変動の過程で果たした役割を探究し、同時に歴史変動の新しい理論を構築しようとするもので、この研究グループの中間報告ともいうべき『思想の冒険』（筑摩書房刊）が共通のテキストとして使用された。

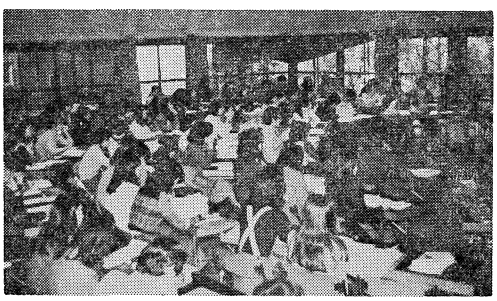
一方、「アジアの平和と開発」を総合テーマに昭和46年から毎年開催されてきた国際学生セミナーが、既報のとおり昨年度の「新しいアジア像を求めて」をもってこのシリーズを終了したため、本年度は年間の共同セミナーの中から今回のセミナーを選んで国際学生セミナーの性格をもたせ、留学生の参加を呼びかけた。

このテーマに対する学生の反響は非常に大きく、予定人員一〇〇名のところ、一八〇名にも及ぶ参加希望者が殺到したため、急遽発題講演の色川大吉先生にもセクション演習を担当していただき、一方では一年生の参加を断わるなどして人数の調整をはかった。

少数ながら、韓国、タイ、米国からの留学生の積極的な参加があり、彼らはいずれも社会学研究科、文学研究科に所属する研究学徒であったため、セミナーの中で果たした役割も大きかった。

参加学生は、別掲の感想文にもうかがえるように、このセミナーを通して既成の「近代化論」にとらわれている自らの思考方法に強い衝撃を受け、また専門領域を異にする諸先生が一つの目標をかかげた共同研究で結ばれている事実と、学問・探究への情熱、厳しい学問に対する姿勢に触発された様子で、中には自主的な研究会を始めたグループもあるようである。

諸先生のご協力によって新春にふさわしい充実したセミナーを実現することができ、本年度の共同セミナーをしめくくることができ



学生版婦人問題会議（第81回大学共同セミナー）

As I am living in Japan and involved with Japanese women, both through my teaching at Tsuda College and my activities with the Quakers, I welcomed the opportunity to attend the inter-university seminar on the problems of women.

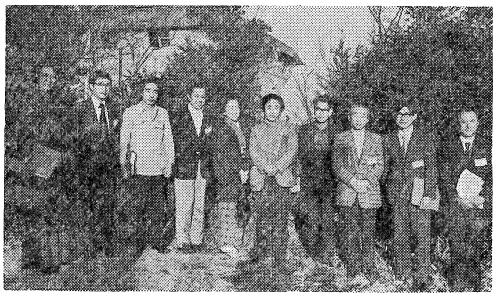
One of the themes of the seminar lectures and discussions which seemed to me to be very important was the repeated mention of the importance of the level of consciousness of both men and women with regard to women's issues. Ms. Michiko Kanda emphasised the need for women to develop their conscience beyond the kind of self-centered one to one which recognises the need to create a society that makes it easier for great numbers of women to develop and use their talents.

One point which particularly struck me was made in a brief address by Mr. Hideo Nishimura, formerly assistant professor of Tokyo University who joined us at dinner. He said that while development and use of abilities is important for women, it is even more important for them to have a clear sense of purpose, based on a solid sense of values.

I left the seminar with a renewed sense of purpose—both in the personal sense of the direction of my own life, and in the broader sense of wanting to organise concrete activities to further the cause of women.

Kathryn Taylor

（第81回大学共同セミナー参加者）


2人おいて左から山田，三輪，鶴見，菊地，小島，桜井，色川，宇野の各氏

たのは大変幸せなことであった。

なお1月27日の読売新聞の東風西風で色川先生は，「伝統の革新」と題し，今回のセミナーに参加した学生達が満足感を抱いて帰った後に重い疲労を感じたとその体験を書いておられるが，活発に発言する若い学生を指導して下さる先生達の奉仕に改めて感謝したい。

……共同セミナーに参加して……

(一)　吉松文雄

個性あふれる先生と接するには，2泊3日は余りにも短い時間ではあったけれど，私達に強い知的刺激を与えて下さった。その生き生きと輝いた目は，私達を魅了し，又圧倒する迫力があった。そこには少数者と自負するだけの学問に対する情熱と意欲があった。

それに触発されたかのように，たった一つの共通点のもとに，初めて顔を合わせた学生達の間にもいつしか深い連帯と一つの絆が出来上り，最後には私達学生も，これから研究会を続けて行こうと言うまでになった。

美しいオリオンの星座の輝く空の下，八王子の丘陵で，深夜まで議論を交し，問題を追求し，自己をも探求しようとした感動は，その友情とともにずっと続いて行くだろう。

これはひとえに人の輪を広げ美しい人間関係を創ろうと配慮された鶴見先生に負う所，大であるけれど，私達の脳裏に残ったものは鉛の様に重く厳しい学問への態度であった。いろんな問題意識が次次とわき上り，自分自身一体何をすれば良いか，どうしたら良いか自問するだけである。

ただ言えることは，この邂逅の喜びと感銘を大事にしつつ，ただ貪欲に師の求めたる所を追求して行くことだけであろう。

（東京大学教養学部2年）

(二)　佐藤憲一

今回の共同セミナーの目的は，欧米の近代化過程を理想的かつ普遍的な社会主動のパラダイムと考える既成の近代化論の前提に対する疑問から，日本・中国・ソ連の社会変動の分析を通じて，これまでの近代化論では無視されてきた土着的伝統の中に，現代に蘇生する革新性を追求し，併せて社会変動の新しいパラダイムを構築しようとするものであった。

僕が参加した鶴見，色川両先生のセクションは，既成の近代化論では，破壊され，解体されるべきものとされてきた「小地域共同体」の積極的役割を，再度，柳田国男の民俗学的視点と成果から，把え直そうとするものであった。「共同体」の分析に，民俗学の成果をもって入ろうとしたのは，一つはこれまでの歴史学に対する不満からであろう。これまでの歴史学は，近代化論の枠を越えることができず「共同体」を積極的に評価することができなかったからである。ともあれ「近代化論」の前提に対する疑問として，まっさきに「共同体」をとりあげたのは，我々は結局今後とも将来にわたり「共同体」の成員として，それを根拠地として，我々の近代化を考えて行くほかはないのだ，という共通の認識があったからである。

セクション演習自体は，時間的制限もあって，決して深みのある話し合いとはならなかったが，ただ一つ，「近代化論」を乗越えようとする僕等自身の思想が，いかに「近代化論」に根ざしているか，毒されているか，を計らずも反省せざるを得ない結果となったことは収穫であった。

郷土の自由民権運動を研究している僕自身の今後の課題は，この「共同体」の役割と民権運動との関係を，歴史民俗学的視点から追求してゆくことだと考えている。

（東北大学46年卒・仙台市博物館勤務）

◈寄贈図書

昭和50年4～6月

「早稲田フォーラム」8～9
　早稲田大学広報課殿
「古典古代における伝承と伝記」
　秀村欣二殿
「国立大学入試改善調査研究報告書」
　国立大学協会殿
「Asian Culture」9，「Tradional Forms of Culture in Japan」
　ユネスコ・アジア文化センター殿
「世界の名著50」　中央公論社殿
「システム科学研究所紀要」6
早稲田大学システム科学研究所殿
「冬の秩父札所」　坂内享殿
「国際交流」5　国際交流基金殿
「大気汚染植物被害写真集」
　サンワみどり基金殿
「早稲田法学」第50巻1～3
「早稲田法学会誌」第25巻
　早稲田大学法学会殿
「政治経済史学」一〇八～九
　政治経済史学会殿
「アジアの昔話1」「Folk Tales from Asia I・II」　飯田恵殿
「太平洋・アジア地域の教育と発展」　林潔殿
「哲学とは」　久野昭殿
「虚無との出合い」吉沢伝三郎殿
「運命と意志」　林田新二殿
「哲学的人間学」「シェリング」
「ニーチェ」「現代哲学入門」
　藤田健治殿
「ウナムーノ・オルテガ往復書簡」
「ヤスパース哲学入門」「現代の人間観」　第77回大学共同セミナー指導教授一同殿
「実存主義」　59～71　以文社殿
「歴史家の嘘と夢」「新編明治精神史」「小さきものへ」
　色川大吉殿
「エナジー対話・詩の誕生」
エッソスタンダード石油広報部殿
「年報第2号」
関西学院大学総合教育研究室殿
「鉄の檻」
　安藤英治殿

企画室のみなさまへ……

川勝豊子

第82回共同セミナーでは講演を聴講させていただきとても勉強になりました。

共同セミナーの評判は，遠く北海道まで届いているらしく，先日小樽に住む友人から手紙がきて，「八王子にある大学セミナー・ハウスというのを知っていますか。そこで催す共同セミナーは大変良いとのことですよ」と書いてあり，驚きました。そのうち，ぜひ参加したいとのことです。

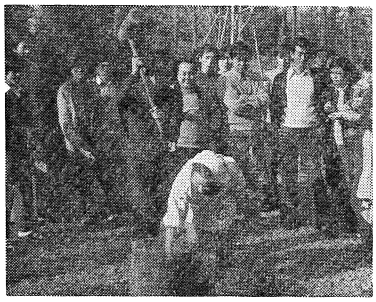
ところで飯田先生のお体の具合はいかがでしょうか。今回，お顔を拝見できなくて淋しい気がいたしました。皆様もお風邪などひきませぬよう，くれぐれもお気をつけ下さい。

（津田塾大学3年）

館長日記から

◆永別……大浜信泉先生。2月21日の葬儀には茅誠司先生が友人代表として弔辞を述べられ、大学セミナー・ハウス創立に参画された無二の友人として、その貢献を感謝して下さった。いずれこのゆかりの多摩の丘で追悼記念会を催したい。私は2月14日の納棺式にはべり、一輪の菊花をお顔に捧げ、多年のご恩にお礼を申し上げ、一瞬この人との出合いの不思議さに感涙した。

◆今年の幕開きは千人会に新会員一〇七名を迎えたことに始まった。建国二百年記念のアメリカの幕開きはロッキード事件である。しかし海の向うの事件とばかりいっておれない日本の問題であることが残念である。◆私はアメリカ通でも何んでもないが、大きなスキャンダルを容赦なく究明する上院議員の中にアメリカ建国のピューリタン精神が生きているように思える。いなそう思うことによって、建国の良心が滅びないように祈りたい。◆私の心の中ではピューリタンの精神と、一つの目的に協力する善意の集団である千人会の精神とがいつの間にか重なり合ってしまうのである。セミナー・ハウスという組織の核心に、個人の心をすえることによって、真の意味の連帯を実現したい。国公私の大学共同体をつくる意義を理解して下さる個人の責任感覚のあかしを千人会と呼ばしていただきたい。国の文教政策を上廻わるような創造的教育プログラムを展開するためには、どうしても金銭的負担をして下さる個人の理解と協力が必要なのである。日本にもそのような自由な教育の場所をつくる知的エネルギーが生まれる頃ではあるまいか。◆ある方から長年買いためた記念切手を沢山いただいた。郵便料の値上がりに悲鳴をあげているらしいが、これを放出するから、これまで通りに便りを書けという心づかいである。三拝九拝して受領した次第である。また、ある老教授は、終身会費に一万円を加えられ、これを郵便料に使いなさいというご親切を寄せられた。私はその激励に驚嘆し、自分の生き方を確かめている。



手づくりの餅に味覚あり（歳末風景その2）

業務通信

年末恒例の餅つき大会は12月19日午後2時より4時まで遠来荘の庭で行われた。朝から業務課と食堂が合同して準備にとりかかり、学生の旺盛な食欲が満たせるようにと一人二合のもち米が用意され、餅つき器ならぬ本物の杵と臼が運び込まれた。

男子職員の奮闘によって遠来荘の庭に餅つきの音が快く響きわたり、おいしそうにつき上った餅は縁側の台の上にのせられると、サービスセンターから派遣されたおばさんたちの手によって次々と一口大にまるめられていく。

学生諸君の中には杵を持ってみようという勇者は以外に少なかったし、彼らの食欲も驚くほどではなかったようである。最後に残った餅は大小の鏡餅に丸められ、館内の各所に飾られ、お正月を迎えることとなった。この日に巡り合わせた好運な利用者は一一〇人。おだやかな日和に恵まれた師走の午後の一時を腹いっぱい楽しんだようである。

仕事納めは28日。暮の利用者の常連である杉野女子大と新英語教育研究会の方々を送り出すと、本年の業務課の仕事もいよいよ終ったという実感がわいてくる。

この一年をふり返ってみると、開館十周年を迎えた記念すべき年であったが、また利用者が月をおって増加した年でもあった。これは何よりもセミナー・ハウスが大学の中に根づよく定着したことのあらわれと思えば、忙しさも苦にはならなかったが、フロントでの応待がともすれば不十分で、お客様に大変ご迷惑をおかけしたのではないかと、この欄を借りてお詫び申し上げたい。

12月の余勢をかって1月の出足も極めて好調。7日には食堂心づくしの七草粥をいただき、新しい年の飛躍を祈った。

15日の〝成人の日〟当日は、東京女子大、横浜国大のゼミの中に該当者が数名おられたので、当ハウスの絵ハガキのセットをお祝いに差し上げた。

因みに一九七六年の業務開始日5日の宿泊者は、理科大・大沢ゼミ、立教大・沢木ゼミ、慶応大・英会話自主ゼミ、立教大・栗原ゼミ、東海大・高橋ゼミ、そして個人利用の工学院大の今井義夫先生であった。

利用状況

＊＝同月2回利用
＊＊＝同月3回利用
＊＊＊＝同月4回利用

◆12月

東洋大学教授＊　藤木三千人
東京都立大学助教授　国井　隆弘
芝浦工業大学講師＊　藤沢　好一
中央大学「中大新報」編集委員会
明治学院大学学会誌編集学習会
東京経済大学講師　西脇　敏男
電気通信大学教授　武井　健三
上智大学教授　尾高　邦雄
早稲田大学講師　鈴木　二郎
大妻女子大学講師＊　神保　信一
早稲田大学教授　村松林太郎
東京大学宇宙航空研究所　大橋　泰二
武蔵大学講師　内田　久雄
東京大学教授　神保　信一
明治学院大学教授＊　岡田　純一
早稲田大学教授　渋谷　隆一
早稲田大学講師　染谷恭次郎
早稲田大学教授＊　荻原洋太郎
電気通信大学助教授　川原　栄峰
早稲田大学教授＊　矢作吉之助
早稲田大学教授　増田　茂樹
明治学院大学教授　馬場　伸也
津田塾大学教授　小島　晋治
東京大学助教授　香原　志勢
立教大学教授　小堀　巖
東京大学教授　山野　康美
明治大学講師　内藤　謙
東京都立大学教授　向井　武文
東京経済大学教授　馬場　伸也
上智大学講師　福山　仙樹
早稲田大学教授　榛沢　芳雄
日本大学助教授　峰岸　純夫
東京都立大学助教授　鮎沢　成男
中央大学教授　島田　征夫
早稲田大学講師　吉田　朋好
津田塾大学講師　大束百合子
東京都立大学助教授　堀川　浩甫
立教大学教授　三戸　公
法政大学助教授　伊藤　玄三

芝浦工業大学教授　十代田知三
早稲田大学教授　畑　穣
法政大学教授　下森　定
東京大学助教授　石井　進
一橋大学助教授　石　弘光
青山学院大学講師　岡田　昌志
上智大学講師　宇野　重昭
東京経済大学教授　江夏美千穂
東京外国語大学教授　原　誠
東京理科大学教授　大沢綱一郎
東京都立大学教授　伊藤　文人
東京大学教授　大田　堯
上智大学神父　アロイジオ・ミヘル
中央大学教授　高窪　利一
東京女子大学短期大学部教授　川村　輝典
学習院大学教授　小倉　芳彦
成蹊大学教授　宇野　重昭
東京大学教授　関口　忠
成蹊大学教授　村松　司叙
東京大学助手　最首　悟
神奈川大学助教授　三浦　孝司
法政大学助教授　矢田　俊文
慶応義塾大学教授　佐藤　豪
明治大学マーケティング研究会　渋谷　一郎
東京工業大学教授　榎本　肇
東京外国語大学教授　竹内与之助
早稲田大学教授　尾関　守
東京学芸大学助教授　大橋　幸
東京工業大学教授　鈴木　弘茂
東京女子大学教授　白井　常
立正女子大学講師　美川　澪子
茅ゼミナール
早稲田奉仕園
高千穂商科大学講師　坂田　長生
大月短期大学講師　村越　洋子
国際経済商学学生協会
東邦大学教授　吉田　光孝
杉野女子大学教授　田村　皖司
独協大学教授　児玉　仁士
京都大学教授　巽　和夫
環太平洋新第三系研究集会
日本小児神経学研究会
児童教育研究会
自動車の排気浄化に関する研究会
新英語教育研究会
ヘルプ・バングラデシュ・コミティ
スリーボンド
東京大学教授　岡　義達
日本女子大学教授　岡本　栄一
武蔵大学助教授　星野　郁美
横浜国立大学講師　佐々木弘明
東京都立大学助教授　稲垣　寛
東京女子大学教授　福田　一郎
東京大学教授　北垣　信行
東京大学教授　諸井勝之助
立教大学教授　大橋　泰二
武蔵工業大学助教授　桑原　哲郎
東京都立大学教授　半谷　高久
日本大学助教授　榛沢　芳雄
武蔵工業大学講師　曾弥　元隆
東京教育大学教授　松延　博
東京大学教授　玉野井芳郎
東京都立大学助教授　鴇田　忠彦
東京家政学院大助教授　亀高京子
芝浦工業大学講師　藤沢　好一
上智大学教授　本間　英世
東京大学助教授　木村尚三郎
東京都立大学教授　古屋野正伍
明治学院大学教授　山中　一郎
青山学院大学講師　笹森　健
東京大学助教授　岡村　甫
東海大学講師　高橋　進
白梅学園短期大講師　民秋　言
都立立川短期大教授　吉田　幸弘
駒沢大学教授　田中　良昭
国士館大学教授　亀山　潔
立正大学助教授　厚東　偉介
東京神学大学教職セミナー
都留文科大学助教授　和田　明子
フレンド英語学院講師　榎並愛子
玉川大学教授　若槻　泰雄
玉川大学教授　酒井　哲夫
ＩＣＳ研究会
日本物理学会
日本自然保護協会
茨城県立結城第一高等学校
ボーイスカウト東京第二三五団
中央大学「中大新報」編集委員会
滝野川教会学校
早稲田奉仕園
堀の内キリスト教会
第82回大学共同セミナー
全総訓関東地区協議会
中央協同組合学園
日本ヒマラヤ山岳協会
日野自動車工業*
日本水産八王子総合工場***
日本電信電話公社
協和醱酵工業
小西六写真工業日野工場
小西六写真工業八王子工場
ＡＤＯ本部
日本化薬
東京都共済連
エネルギー経済研究所

【個人利用】

上智大学学生　中田　睦子
上智大学学生　唯野　礼子
一橋大学講師　佐藤　共子
芝浦工業大学教授*　十代田知三
青山学院大学助教授　岸　英朗
工学院大学助教授　今井　義夫
大妻女子大学学生　田中　敏子

◆1月

立教大学助教授　栗原　彬
慶応義塾大学英会話自主ゼミ
立教大学教授　沢木　敬郎
東京理科大学教授　大沢綱一郎
東京大学助教授　鈴木　博
法政大学教授　霜島　甲一
東京都立大学助教授　吉田　精一
横浜国立大学講師　青柳　肇
東京大学教授　五十嵐　顕
法政大学助教授　麻生　宗由
立教大学助教授　丹羽　克治
工学院大学助教授*　今井　義夫
一橋大学講師**　佐藤　共子
法政大学教授　西川大二郎
芝浦工業大学教授　十代田知三

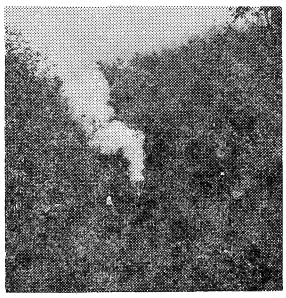
【個人利用】

◇郷愁を誘う炭焼き

多摩の民家・遠来荘はすっかりキャンパス内の名所となって、多くの利用者に愛用されているが、冬期の利用上の難点は暖房である。いろりの使用は火災予防上問題があるので木炭の使用を検討したが、昨今では値段の高いこともさることながら、入手先を見つけることすら困難である。

そこで構内には自生のナラ、クヌギ等の雑木が間伐を待っていることに着目し、施設課の職員が炭焼きを思いたった。

野外劇場に至る斜面の一隅に深さ六〇センチ、約二メートル四方の穴を掘って、この地方で呼ばれている〝掘掛け焼き（ほっかけやき）〟で、12月5日に第一回が開始された。焼き上るには一週間の日数を必要とする。空気孔の太さの調整など試行錯誤を繰返し、約六俵ほどの炭が焼き上った。この炭焼きを通して「先祖の人々が日夜精根を尽して経験の中から生み出した知識に敬服するとともに、大切な遺産として継承していくことの必要を痛感した」と陣頭指揮をとった職員の西村老先輩は語っている。



雑木林の中に白い煙（歳末風景その3）

編集後記

本号では主として千人会員増加運動と三〇〇万円募金の記事を取り扱いましたが、一行一行のお名前に十年の年輪を感じました。本年度の最終号を編集しながら、十年に因んだ記事の多かったこの一年を改めてふりかえってみました。（能）